
記憶の彼方に

子鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の彼方に

【Nコード】

N1155C

【作者名】

子鉄

【あらすじ】

主人公18才（女）はハンバーガー屋で働くことになった。しかし、そこで気付かされたことは……

(前書き)

これは私達誰もが気を付けたい病気の話です。

いらっしやいませ。

爽やかな笑顔と明るい声が店内に響き渡る、私は今日から駅前
のMAXバーガーで働く。

私達スタッフの笑顔でお客さまが笑顔になり、お客さまの笑顔が私達を更に笑顔にしてくれる。

そんな素敵なお店で素敵な仲間と働けるのが何よりの楽しみだった。

厳しい研修を終え、マニュアルをしっかりと暗記し、身仕度を整え、今日からいよいよお客さまの前に立つ。真新しい制服は自分をとってもフレッシュな気持ちにした。
よしっ、がんばるぞ。

こんにちわ、今日は何になさいますか？

始めてのお客さまは40才位の少し渋めなサラリーマン風の男性だった。

ああ、ハンバーガーとポテトもらえるかな。

はい、かしこまりました。

一緒にお飲物はいかがですか？

いや、いいです。

かしこまりました。

ではMAXシェイクはいかがでしょう？

いや、いりませんよ。

飲み物は要らないって言ったでしょ？
シェイクは飲み物でしょ？

男性は少しイライラしながら面倒臭そうに言った。

かしこまりました。

一緒にミックスバーガーはいかがでしょう？

ミックスバーガーが欲しかったら最初から頼んでるよな？ うん？

男性は穏やかながら鋭い言葉で突き刺した。

その言葉で私はいつもの落ち着きを失いつつあった。

かつ、かしこまりました。

本日はポテトがお薦めですが、いかがでしょうか？

はっ？ポテトは頼んだわなっ！

男性の目がみるみる鋭くなり、私の緊張は益々高まった。

・・・こんな時こそマニュアル通りしっかりやらねば。

おっ、お砂糖とミルクはいくつ必要でしょうか？

はあっ？ハンバーガーとポテトにお砂糖とミルクは要らないなっ！

がっ、かましこ、かましこりした。

私は動揺と緊張でもはや人と話をできる状態ではなかった。

もう何でもいいから早くしてくれよ！

新人か？ゆとり教育かこの店は！

世の中には絶対に言っではいけないことがある。

『最近太った？』

『髪型変だね。』

『君のお母さんがスーパーのお一人様一つまでの品物を何回も並んで買ってたよ。』

などである。

その中で一番言っではいけないのが『ゆとり教育』である。

そっ、そういう言い方ないじゃないですか！

私は緊張と混乱で気分が高ぶっていた。

思えば自分を見失っていたのかもしれない。

あ？口答えしていいのか？おおっ！

なっ、なんなんですか！ おま、あなたは。

おい！

今お前つつったな？

お前つつったなっ！！

二人のやりとりに周りは騒然となっていた。

言ってません。

言った。

言ってません。

言った。

言いました。

言った。

・・・っ？言ったんじゃねーか！

言ってません。

言ったって言っただな？

言ったって言っってませんって言っってません。

はあ？もういいわ。

わけがまったく分かんねーよ。うっとおしいんだよ。さっさとハンバーガーよこせボケツ。

え？え？

今なんておっしゃいました？

早くしろボケツで言っただよ、ダボ作がっ！

だっ、ダボ作っ！？人が一番気にしてることをっ。
むぎぎぎぎっ。

私は怒りに震え、その場に立ちつくした。

それから自分がどうしたのか、どうやって帰ってきたのか記憶がなかった。

ただ分かったことは自分がクビになったことだった。

封筒に入ったお金800円と、『ごくろうさまでした、もう結構です』と書かれた紙が総てを物語っていた。

私は新しい仕事をわずか一時間で失ったのだ。

スマイル0円、時給800円、今日の経験プライスレス。

私はそう自分に言い聞かせた。

ふと鏡に映った自分の顔を見ると、口のまわりにべっちよりケチャップが付いており、自分がしでかしてしまったことを想像して怖くなった。

それだけではない、今の今まで気付かなかったが、自分の手には果物ナイフが握られており、尖ったナイフの先にウインナーが二本刺さっていたのだ。

自分はいったい何をしてしまったのだろう。

思えば私はいつもそうだった。

あれは小学校五年生の遠足の前日だった。

二週間前から念入りに準備をし、万が一にも遅刻しない為に、前の晩から学校の正門前で段ボールにくるまってバスが来るのを待って

いたのに寝坊した。

段ボールには無数の足跡が付いていたのにだ。

それだけではない。 高校二年の文化祭の日だってそうだ。

あの時は確か……えーと、なんだ、あれだわ。

あっ！

あれは違うわ。

うん。

とにかく、私はいつだって大事な場面で失敗してきたんだ。

自分で自分が許せなかった。情け
なかった。

でも、けじめというものはつけないといけない。

私はケチャップを拭き取り、ウインナーをポチに投げると再び駅前
に向かって歩きだした。

店の前まで戻ると、サングラスとマスクをし、意を決し店内に入っ
た。

いらっしやいませ。

あ、あの、店長さんいますか？

いえ、今はおりませんが。どういったご用件でしょうか？

本当なら共に働く筈であったお姉さんの眩しい笑顔に動揺した。

これが本当の笑顔と言うものだ。

これに比べたら私なんかまるでゾウリムシじゃないか。

月とすっぽん。

いや、お姫様と近所のアホくらいの差があった。

やはり私には無理だったんだ。

こっ、これ店長さんに渡しといってもらえますか？

そう言うとは私はお姉さんに箱を手渡し、そそくさとその場を去った。

これでよかったんだ。

安堵のため息を一つつくの家路を急いだ。

その夜、店に戻った店長が箱を開けると、そこにはハンバーガーらしき物が入っていた。

そのバーガーをパカッと二つに開くと、紙が一枚挟まっていた。

『楽しかったよ。』

それだけ書かれてあった。ケチャップで書かれてあった。

それを見た店長は無力な自分を嘆いて泣いたという。

彼が辞表を提出するのはその三日後のことだ。

現在日本において無記憶症候群を患っている患者は推定二千万人と
言われている。

これは実に国民の六人に一人がこの症状に苦しんでいると言える。

※ニコニコ新聞調べ

もしかしたら、私も、あなたも、あなたの大事なあの人もこの病にかかるかもしれないのである。

以下のような例に当てはまる方は要注意である。

1. あれ？何しようとしてたっけ？

2. 婆さん飯はまだかいや？
今食べてるでしょ！

3. お母さんお年玉ちょうだい。
去年あげたでしょ！

4. すいません、お味噌はどこですか？
え？私、店員じゃありませんけど。

上記のような症状があれば、あなたも一度病院に行ったほうがいいでしょう。

そう論文を締め括ると私はノートパソコンを静かに閉じた。

ふうっ、何があるか分からないのが人間だからな。

一度検査だけでもしてもらおうか。

私は午後一番の診療に向かうため足早に家を出ようとした。

ふと、テーブルの上を見るとそこには先程もらってきたばかりのお薬が置かれていた。

(後書き)

感想をお待ちします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1155c/>

記憶の彼方に

2011年3月19日16時26分発行